ウダヤナの解脱論

山本和彦

目次

序　論
先行研究
ヴァイシェーシカ学派の解脱論
『キラナーヴァリー』の解脱論
結　論
略　号
参考文献

序　論

本論文の目的は、『ニヤーヤ・スートラ』(Nyāyasūtra 正理経 一五〇頃) からガンゲーシャ・ウパーディヤーヤ (Gaṅgeśa Upādhyāya 一三二〇頃) の『タットヴァ・チンターマニ』(Tattvacintāmaṇi 真理の如意宝) へというニヤーヤ (Nyāya 論理、正理) 学派の解脱論の歴史の流れのなかでのウダヤナ・アーチャールヤ (Udayana Ācārya 九八四／五

もしくは一〇二五―一一〇〇[1]著『キラナーヴァリー』（Kiraṇāvalī 光の首飾り）の解脱論を明らかにすることである。

ウダヤナはニヤーヤ学派（Naiyāyika）の論書に対して註釈し、ヴァイシェーシカ（Vaiśeṣika 勝論）学派の論書に対しても註釈した。彼の解脱論は、ニヤーヤ学派の立場では『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・パリシュッディ』（Nyāyavārttikatātparyaparisuddhi 正理評釈解明）、『アートマ・タットヴァ・ヴィヴェーカ』（Ātmatattvaviveka アートマンの正しい識別）のなかで、ヴァイシェーシカ学派（Vaiśeṣika）の立場ではプラシャスタパーダ（Praśastapāda 五五〇―六〇〇頃）の『パダ・アルタ・ダルマ・サングラハ』（Padārthadharmasaṃgraha 句義法綱要）の註釈書『キラナーヴァリー』（Kiraṇāvalī 光の首飾り）のなかで論じられている。『キラナーヴァリー』において解脱は、ほぼ冒頭で論じられており、『アートマ・タットヴァ・ヴィヴェーカ』では最後に論じられている。『アートマ・タットヴァ・ヴィヴェーカ』と『キラナーヴァリー』に対しては、ガンゲーシャ以降の多くの新論理学者が註釈している。

『キラナーヴァリー』に対する註釈書のなかで、新論理学（Navya-nyāya）の基礎を築いたガンゲーシャの解脱論について論じられているものが多くある。たとえば、ガンゲーシャの息子であるヴァルダマーナ（Vardhamāna Upādhyāya 一三四五頃）の『キラナーヴァリー』に対する註釈書『キラナーヴァリー・プラカーシャ』（光の首飾り解明）は、『タットヴァ・チンターマニ』の文章からの引用が多い。さらに、マトゥラーナータ・タルカヴァーギーシャ（Mathurānātha Tarkavāgīśa 一六五〇頃）の『キラナーヴァリー』に対する註釈書『キラナーヴァリー・ラハスヤ』（光の首飾り秘要）はガンゲーシャを意識して書かれたものであり、『タットヴァ・チンターマニ』の註釈書と言えるほどである。新論理学派の解脱論に関しては、『タットヴァ・チンターマニ』ではなく『キラナーヴァリー』に対する諸々の註釈書からその歴史が見えてくる。[2]

先行研究

ウダヤナの『キラナーヴァリー』の解脱論に関する部分は、Tachikawa 2001において英訳されているが、ウダヤナの解脱論を包括的に論じた研究はない。初期のニヤーヤ学派の解脱論に関しては、山本二〇一〇において詳細に論じたのでここでは再論しない。初期のヴァイシェーシカ学派の解脱論についての先行研究は、野澤一九八一のなかで挙げられている。本論文では、これ以降の研究である服部一九八九、安達一九八四、野沢一九八一、一九九五、Nozawa 1996, 野沢二〇〇〇、Bronkhorst 2009を主に参照する。

『ヴァイシェーシカ・スートラ』（Vaiśeṣikasūtra 勝論経一〇〇頃）研究の大きな論点は、解脱論とカテゴリー論とを分断し、カテゴリー論こそが原型であり、解脱論は後代の付加であるというフラウワルナー説[3]をどう考えるかである。これに対して、『ヴァイシェーシカ・スートラ』は元来、宇宙論（解脱論）とパダールタ（カテゴリー）論という異質な思想が重層的に併存しているというのが野沢説である。[4] 解脱が目的であり、その手段としてダルマとカテゴリー（句義）を説くと考えれば、『ヴァイシェーシカ・スートラ』をばらばらに分解する必要はない。山本二〇一〇においても、ヴァイシェーシカ学派と姉妹学派であるニヤーヤ学派の根本経典『ニヤーヤ・スートラ』は解脱論と認識論・論理学という異質な層から成り立っていることを明らかにした。異質なものの併存はインド文化の特徴である。

さらに鈴木二〇一〇は、「解脱の存在」の認識手段に関して、ヴァイシェーシカ内部において「論理」（推理）と「聖典」とのふたつの志向があることを指摘している。解脱論における推理と聖典の問題についてはガンゲーシャも言及している。[5]

ヴァイシェーシカ学派の解脱論

ニヤーヤ学派とヴァイシェーシカ学派は姉妹学派であるが、解脱論に関しては異なっている。ニヤーヤ学派が解脱（apavargya）を真理知（tattvajñāna）による苦（duḥkha）の滅と考えるのに対して、[6] ヴァイシェーシカ学派は解脱（mokṣa）をダルマ（dharma）による不可見力（adṛṣṭa）の滅と考える。[7]

輪廻説に関しても両者は異なっている。ニヤーヤ学派は輪廻の主体をアートマン（ātman）であると考えるが、[8] ヴァイシェーシカ学派はマナス（manas）と考える。[9] ニヤーヤ学派は輪廻の原因をカルマン（karman）と考えるが、ヴァイシェーシカは不可見力（adṛṣṭa）と考える。[10] まず『ヴァイシェーシカ・スートラ』の解脱論を概観する。

最初の三つのスートラにおいて『ヴァイシェーシカ・スートラ』の目的が宣言される。

> さて、これから、われわれはダルマを説こう。[11]
> そこから繁栄（生天）と至福（解脱）とが成立するものが、ダルマである。[12]
> それ（ダルマ）を説くから、聖典（ヴェーダ）には権威がある。[13][14]

この三つのスートラは『ヴァイシェーシカ・スートラ』の解脱論（宇宙論）[15] をよくまとめている。つまり、解脱論の内容として、ダルマ、生天（天界に生まれること）としての繁栄（abhyudaya）、解脱としての至福（niḥśreyasa）、聖典（āmnāya）を説くと言っているのである。ダルマを解脱の手段と考えるのはヴァイシェーシカ学派の特徴である。しかしニヤーヤ学派のガンゲーシャは、真理知があればダルマは必要ないとヴァイシェーシカのダルマによる解脱論を批判する。[16]

『ヴァイシェーシカ・スートラ』では解脱の手段として、ヨーガの実修[17]とダルマ[18]があげられている。ダルマに関しては、『ヴァイシェーシカ・スートラ』第六章の全三七スートラにおいて詳細に説かれている。これらのダルマは聖典で教示される宗教的義務であり、社会階級や四生活期の規定などである[19]。

解脱を得る手段は、ヴェーダの知識（jñāna）か、祭式行為（karman）か、それとも知識と行為の併合（samuccaya）か、という議論がある。これは知行併合論（jñānakarmasamuccayavāda）と呼ばれるものであり[20]、解脱論のなかで大きなトピックを形成している。『ヴァイシェーシカ・スートラ』時代の初期のヴァイシェーシカ学派は、この分類で言えば行為論者（karmavādin）ということになる。

プラシャスタパーダ（五五〇―六〇〇頃）以降の註釈書の時代になると解脱は、知識（buddhi）・楽（sukha）・苦（duḥkha）・欲望（icchā）・嫌悪（dveṣa）・努力（prayatna）・善行（dharma）・悪行（adharma）・潜在印象（saṃskāra, bhāvanā）という九つ（nava）の「アートマン固有の属性」（ātmaviśeṣaguṇa）[21]がなくなることと言われるが[22]、これはニヤーヤ学派にはない解釈である。ウパスカーラ本（VSU）で付加されているVSU 1.1.4やPDhS[23]では、真理知から至福があると言うが、これは『ニヤーヤ・スートラ』[25]の影響を受けた結果であり、初期のVSの考えにはない[26]。

『キラナーヴァリー』の解脱論

『キラナーヴァリー』の解脱論は、「至福[27]」・「苦の滅[28]」・「真理知[29]」・「知行併合論[30]」・「ダルマによる繁栄と至福[31]」という五つのトピックから構成されている[32]。仏教・サーンキヤ・ヴェーダーンタ・ミーマーンサーの説を批判し、解脱は「苦の滅」であるという古典論理学派の説を支持する。そして真理知によって苦の滅はあると言うが、その真理知はダルマからもたらされると言う。ニヤーヤ学派の解脱論では祭式行為としてのダルマを必要とせず、ヨーガ（瞑想）によって真理知は発生すると考える。プラシャスタパーダは、自在神の教令によるダルマから真理知が生じると

言う。[33] ウダヤナはこのPDhSのダルマを次のように解釈する。

「それ（真理知）はどこから〔生じるの〕か」〔という問い〕に対して〔プラシャスタパーダは〕次のように答える。「それは」と。自在神の教令は、教示であり、ヴェーダである。それ（自在神の教令）によって、明らかにされ示されたダルマからのみ〔真理知は生じる〕という意味である。この意味は次の如くである。論書による範疇の考察の後で、天啓聖典・伝承文学・歴史・古伝書で教えられているヨーガの方法によって、長時間マナスを制することから得られる滅という特徴を持つダルマからのみ真理知は生起する。[34]

ここでのダルマは、自在神に示された聖典の教説であるヨーガによって生じた「善行の結果」である。「滅という特徴を持つダルマ」は、PDhSに説かれている「純粋な（kevala）ダルマ」のことである。[35] この純粋なダルマはアダルマを伴わず、自己消滅する。ヨーガから生じるダルマはPDhSによればアートマンの属性であり、ヴァイシェーシカのカテゴリー（句義）論で論じられるテーマである。このダルマは祭式行為ではない。ウダヤナは「自在神の教令」をヨーガの方法論、そして「ダルマ」をヨーガから生じたダルマと解釈する。

それゆえ、サットヴァ（アートマン）[36]の浄化を通して、行為は間接的補助因であり、そして真理知は直接的補助因である、と理解すべきである。[37]

それゆえ、真理知のみが解脱の根拠である。しかし、諸行為は、知識を求める人に知識が生じないとき、それ（真理知）の妨害者であるアダルマを排除するという方法で、贖罪のように必要である。[38]

この二つの文章の内容は同じである。「アートマンの浄化」とはアダルマの排除のことである。[39] ここでの行為は、常住行為や臨時行為のような祭式ではなく、悪業（アダルマ）排除の贖罪行為（prāyaścitta）[40] である。

ヴァイシェーシカではダルマの重要性を説明する必要がある。それは『ヴァイシェーシカ・スートラ』が冒頭でダルマによって解脱を得ると宣言しているからである。ダルマの重要性は、知行併合論によって補強される。つまり、初期ヴァイシェーシカ学派は、知識ではなく、ヨーガの実修と宗教的義務としてのダルマによって解脱を得るという行為論者（karmavādin）であった。[41] しかし、ニヤーヤ学派の影響により、真理知（tattvajñāna）もまた解脱の手段であるという立場になり、行為と知識との両方が必要であるという知行併合論者になった。真理知の導入は PDhS において見られるが、知行併合論の議論は見られない。知行併合論は、ウダヤナと同時代のシュリーダラ（Śrīdhara 九九一）の『ニヤーヤ・カンダリー』（Nyāyakandalī）においても議論されている。[42] これは、解脱には知識と祭式行為との両方が必要であるという考えである。しかし、知識と行為とは同等なのか、それともどちらか一方に重点をおくのか、という点で論者の意見は分かれる。伝統的にミーマーンサー学派は祭式行為に重点をおき、ヴェーダーンタ学派は知識を重んじる。ウダヤナは見えるもの（dṛṣṭa）と見えないもの（adṛṣṭa）の例で真理知とダルマの関係を説明する。[43] 知識と行為とは同等ではない。知識が直接補助因（arādupakāraka）であり、行為は間接補助因（sannipatyopakāraka）である。解脱の手段は知識であり、行為は知識が生じないときのみその手段となる。ガンゲーシャはヴァイシェーシカのダルマ理論とウダヤナの知行併合論を批判する。[44]

最後に、ウダヤナは同じダルマが生天と解脱をともにもたらすと『ヴァイシェーシカ・スートラ』を註釈する。[45] ダルマは繁栄（生天）にとって直接因であるが、至福（解脱）にとっては間接因である。宗教的義務であるダルマとしては同じであるが、生天をもたらすのは常住行為や臨時行為であり、解脱の間接因となるのはアダルマを排除する贖罪行為（prāyaścitta）である。

結　論

『キラナーヴァリー』での解脱論の特徴は、ヴァイシェーシカのダルマの理論を知行併合論へと移行させたことである。これは『ニヤーヤ・カンダリー』おいても見られることである。しかし、ウダヤナの知行併合論は知識重視である。解脱の根拠（hetu）であり、直接因である真理知（tattvajñāna）が生じないときにのみ、宗教的義務（dharma）としての行為（karman）は解脱の間接因となる。

ウダヤナは、ヨーガによって生まれたダルマが真理知を生起させると言う。このダルマはアートマンの属性である。アートマンの属性であるアダルマを排除する贖罪行為（prāyaścitta）は、真理知の発生を促し、解脱の間接手段となる。ウダヤナは、常住行為・臨時行為・願望行為・禁止規定・遊行期の規定などを解脱の間接因として認めない。[46] シュリーダラは、願望行為と禁止規定とを解脱の手段としては否定するが、[47] 常住行為と臨時行為に関しては認めている。[48]

知識は単独で解脱の手段となり得るが、行為が単独で解脱の手段となることはない。知識のみか、知識と行為との併合かどちからが解脱の手段となる。後者の場合でも、行為は間接手段である。ダルマを解脱の手段として出発したヴァイシェーシカはウダヤナによって知識重視の知行併合論者となった。しかし、ガンゲーシャはこのウダヤナの解脱論を批判する。ダルマを否定し、知識のみの解脱論を説き、その認識手段は推理であると言う。これについては別稿を予定している。

註

（1）ウダヤナ著『ラクシャナーヴァリー』（Lakṣaṇāvalī）の写本にはシャカ（Śaka）暦で九〇六年（tarkāṃbarāṅka）と記されており、西暦では九八四年もしくは九八五年になる。しかしBhattacharya 1958: 51-54は、ウダヤナとジュニャーナシュリーミトラ（Jñānaśrīmitra 一〇五〇頃）とは同世代であると考え、この記述を無視しウダヤナの年代を一〇二五―一一〇

〇年であると主張する。

(2) ウダヤナ著『キラナーヴァリー』に対するガンゲーシャ以降の（副）註釈者としては、Vardhamāna (c. 1380), Śaṅkara Miśra (c. 1430), Śeṣa Śārańgadhara (c. 1420), Jayadeva Pakṣadhara Miśra (c. 1450), Bhagīratha Megha Ṭhakkura (c. 1550), Rucidatta Miśra (c. 1510), Raghunātha Śiromaṇi (c. 1530), Rāmakṛṣṇa Bhaṭṭācārya Cakaravarti (c. 1570), Bhavānanda Siddhāntavāgīśā (c. 1600), Rudra Nyāyavācaspati (c. 1630), Rudrabhaṭṭācārya (c. 1630), Padmanābha Miśra (c. 1650), Mathurānātha (c. 1650), Kṛṣṇaṃbhaṭṭa Arde (c. 1800), Viśvanātha Jha (c. 1891), Bacchā Jhā (c. 1910) などがいる。

(3) Frauwallner 1984. Cf. Wezler 1982.

(4) 野沢一九九五参照。

(5) TC 195.11-12: tad asyāpavargasya paramapuruṣārthasya śrutisiddhaṃ kāraṇam anumānam iti viviktam ≡「それゆえ、人間の究極の目的であるこの解脱にとって、天啓聖典によって成立する手段は、推理のみである」

(6) NS 1.1.22. 山本二〇一〇参照。

(7) 正確に言えば、不可見力がないと、アートマンと身体が結合せず、身体が現れない。それが解脱である。VS 5.2.20: tadabhāve saṃyogābhāvo 'prādurbhāvaḥ sa mokṣaḥ | スートラ番号は Jambuvijayaji 1961 (GOS 136) に従う。

(8) NS 3.1.17-20. 服部一九九六、五三〇参照。

(9) VS 5.2.19: apasarpaṇam upasarpaṇam aśitapītasaṃyogaḥ kāryāntarasaṃyogāś cety adṛṣṭakāritāni | 野沢一九八一、二〇〇〇参照。

(10) VS 5.2.19-20. 野沢一九八一、二〇〇〇参照。

(11) VS 1.1.1: athāto dharmaṃ vyākyāsyāmaḥ |

(12) VS 1.1.2: yato 'bhyudayaniḥśreyasasiddhiḥ sa dharmaḥ |

(13) 「それ」の解釈は「ダルマ」以外に「自在神」、「繁栄と至福」などがある。Cf. Bronkhorst 2009: 324.

(14) VS 1.1.3: tadvacanād āmnāyasya prāmāṇyam |

(15) 野沢一九九五参照。

(16) TC 188.9-14.

(17) VS 5.2.16-17: ātmendriyamano 'rthasannikarṣāt sukhaduḥkhe tadanārambhaḥ | ātmasthe manasi saśarīrasya sukhaduḥkhābhāvaḥ sa yogaḥ |

(18) VS 6.1.1-6.2.16. 野澤一九八一、四六八参照。

(19) 服部一九八九、菱田一九九二、五一一五五参照。

(20) 村上一九七九、金沢二〇〇三参照。

(21) TBh 85.7-8: buddhyādayo 'dharmāntā bhāvanā cātmaviśeṣaguṇāḥ |「認識で始まり、アダルマと印象とで終わるものが、アートマン固有の属性である」Athalye 1897: 361-362.

(22) NK 619.11-12: mokṣo navānām ātmaviśeṣaguṇānām atyantocchedaḥ |「解脱とは、九つのアートマン固有の属性の絶対的な断滅である」VSC 2.3: niḥśreyasam adhyātmano vaiśeṣikaguṇābhāvarūpo mokṣaḥ | 野澤一九八一、四六八参照。

(23) VSU 1.1.4: dharmaviśeṣaprasūtād dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣasamavāyānāṃ padārthānāṃ sādharmyaviadharmyābhyāṃ tattvajñānān niḥśreyasam | このスートラは VSC, VSV にはない。

(24) PDhS 23.2-3: dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣasamavāyānāṃ ṣaṇṇāṃ padārthānāṃ sādharmyavaidharmyatattvajñānaṃ niḥśreyasahetuḥ |

(25) NS 1.1.1: pramāṇaprameyasaṃśayaprayojanadṛṣṭāntasiddhāntāvayavatarkanirṇayavādajalpavitaṇḍāhetvābhāsacchalajātinigrahasthānāṃ tattvajñānān niḥśreyasādhigamaḥ |

(26) 野澤一九八一、四七一参照。

(27) Kir 15.1-26.29.

(28) Kir 27.14-33.22.

(29) Kir 34.25-35.4.

(30) Kir 40.1-17.

(31) Kir 54.4-8.

(32) Tachikawa 2001.

(33) PDhS 26.1: tac cesvaracodanābhivyaktād dharmād eva |「それ（真理知）は、自在神の教令によって明らかにされたダルマからのみ〔生じる〕」

(34) Kir 34.28–35.1: tac ca kuto bhavatīty ata āha tac ceti | īśvaracodanā* upadeśo veda iti yāvat | tenābhivyaktāt pratipāditād dharmād evety arthaḥ | ayam arthaḥ śāstreṇa pādārthān vivicya śrutismṛtītihāsapurāṇopadiṣṭayogavidhinā dīrghakālādaranairantaryasevitān nivṛttilakṣaṇād dharmād eva tattvajñānam utpadyate, yato 'pavṛjyate | * Kir 1971. Kir 1981: īśvaradeśanā. Kir 1911: īśvarasya codanā.

(35) PDhS 632.1: nivṛttilakṣaṇaḥ kevalo dharmaḥ.「滅を特徴とする純粋なダルマが〔生じる〕」。

(36) NS 4.2.45: ātmasaṃskāro.「アートマンの浄化」。KirR 40.24: sattvam ātmā |「サットヴァとはアートマンである」。Cf. BhG 16.1: sattvasaṃśuddhi. シャンカラとラーマヌジャは「サットヴァ」を内官（antaḥkaraṇa）、つまりマナス（意、思惟器官）と解釈する。上村一九九二、二〇九、菱田一九九三、五五参照。

(37) Kir 40.1–2: etena sattvaśuddhidvāreṇārādupakārakaṃ karma sannipatyopakārakañ ca tattvajñānam iti mantavyam |

(38) Kir 40.14–16: tasmāt tattvajñānam eva niḥśreyasahetuḥ | karmāṇi tv anutpannajñānasya jñānārthinas tatpratibandhakādharmanivāraṇadvāreṇa prāyaścittavad upayujyante |

(39) KirR 40.24–25: tasya śuddhis tattvajñānotpattipratibandhako 'dharmanāśaḥ |「その浄化とは、真理知生起の妨害者であるアダルマの滅である」

(40) KirṬ 626.20–22: prāyaścittavad iti | yathā prāyaścittakartṛtur brahmahatyādijanyaduḥkhanivṛttim abhilaṣatas taddhetubhūtādharmocchede vyāpāraḥ.「『ブラーヤシュチッタのように』と。たとえば、贖罪を行う者にとって、婆羅門殺しなどによって生じる苦の滅を望むことから、その原因となるアダルマを断滅する場合の作業である」婆羅門殺しについては、渡瀬一九九〇、一七三―一七五参照。

(41) 野澤一九八一参照。

(42) NK 632.17–18: kiṃ jānamātrān muktiḥ? uta jñānakarmasamuccayāt? jñānakarmasamuccayād iti vadāmaḥ |「〔対論者〕解脱は、知識のみからあるのか、それとも知行併合からか。〔シュリーダラの答論〕「知行併合から」とわれわれ（ヴァイシェーシカ学派）は主張する」

(43) Kir 40.1-2. Kir 40.2-4: na tu tulyakakṣatayā tatsamuccayaḥ | nāpi jñānena dharmo janyate vihitatvād iti dharmasyaiva prādhānyam | dṛṣṭadvāreṇaivopapattau adṛṣṭakalpanānavakāśāt | anyathā bheṣajādividhiṣv api tathā kalpyeta |「しかし、それ（知識と行為）の併合は、同等ではない。また知識によってダルマが生じ、享受されるからといって、ダルマこそが最も主要なものだということもない。見えるもの（知識）によってのみ〔解脱が〕考えられる場合、見えないもの（ダルマ）の想定の余地はないから。さもなければ、薬（見えるもの）などに対する教令（見えないもの）の場合でさえも同様に考えられるから」

(44) TC 187.6-188.14.

(45) Kir 54.6-8: anyathāvyākhyāne hi yato 'bhyudayeti pratyekasamudāyābhyām ubhayatrāpy avyāpakaṃ syāt | yato 'bhyudayasiddhiḥ sa dharma ity etāvataiva lakṣaṇasiddhe pāramparyeṇa niḥśreyase 'py asya hetutvaṃ pratipādayituṃ niḥśreyasagrahaṇam iti |「もし別の説明（あるダルマが繁栄を別のダルマが至福をもたらすの）であれば『そこから繁栄がある』は単一の生起者と集合的な生起者との両方の場合でさえ、不遍充になるだろう。『そこから繁栄が成立するもの、それがダルマである』という定義が成立するとき、間接的に至福（解脱）の場合もまたそれ（ダルマ）が根拠であることを示すために、至福ということばが用いられている」Cf. KirR 54.19: karmādilakṣaṇadharmaviṣayakatve | KirR 54.25: asya karmaṇaḥ |

(46) Kir 40.4-9: upapattiviruddhaś ca jñānakarmasamuccayaḥ | kāmyaniṣiddhayos tyāgād eva samuccayānupapatteḥ | nāpi asaṅkalpitaphalakāmyakarmasamuccayaḥ caturthāśramavidhiviroḍhāt | yāvan nityanaimittikasamuccayasyāpi tata evānupapatteḥ | yatyāśramavaihitakarmaṇā jñānasya samuccaya ity api nāsti | tadabhāve 'pi gṛhasthasya jñāne sati mukteḥ |「また知行併合は、〔四住期と〕矛盾した考えである。〔四住期では〕願望行為と禁止規定を捨てるから、〔知識と行為の〕集合は考えられないから。さらに〔知識と〕結果を考慮しない願望行為との集合は、四住期の規定と矛盾するから。〔知識と〕常住行為や臨時行為との集合もまたその理由から考えられない。知識と遊行期の規定行為との集合もまた考えられない。それ（行為）なしでも、家住期の人は知識があれば、解脱するから」

(47) NK 633.2-3: yāni kāmyāni karmāṇi pratiṣiddhāni yāny api | tāni bandhanty akurvantaṃ nityanaimittikāny api ||「願望行為と禁止規定は、〔それを行う人を〕束縛する。常住行為と臨時行為は、それを行わない人を束縛する」

(48) NK 632.18-19: nityanaimittikakarmādhikāro na nivarttate.「常住行為と臨時行為の権威は否定されない」。NK 635.23: nityanaimittikair eva kurvāṇo duritakṣayam |「常住行為と臨時行為によってのみ行為者は、苦の生起者（悪）を滅する」

略号

BhG	Bhagavadgītā in Mahābhārata of Vyāsa in Sukthankar 1947.
Kir	Kiraṇāvalī of Udayanācārya in Gaurīnātha Śāstrī 1981. Cf. Sārvvabhouma 1911, Jetly 1971.
KirP	Kiraṇāvalīprakāśa of Vardhamānopādhyāya in Sārvvabhouma 1911.
KirR	Kiraṇāvalīrahasya of Mathurānātha Tarkavāgīśa in Gaurīnātha Śāstrī 1981.
KirṬ	Kiraṇāvalīṭikā of Bhaṭṭa Vādīndra in Narendrachandra 1956.
NK	Nyāyakandalī of Śrīdhara in Jetly 1991.
NS	Nyāyasūtra of Akṣapāda Gautama in Ruben 1928.
PDhS	Padārthadharmasaṃgraha of Praśastapāda in Jetly 1991. Cf. Jetly 1971.
TBh	Tarkabhāṣā of Keśava Miśra in Bhandarkar 1979.
TC	Tattvacintāmaṇi of Gaṅgeśa Upādhyāya in Kāmākhyānātha Tarkavāgīśa 1897.
VS	Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda in Jambuvijayaji 1961. Cf. Thakur 1957, Nārāyaṇa 1969.
VSC	Vaiśeṣikasūtravṛtti of Candrānanda in Jambuvijayaji 1961.
VSU	Vaiśeṣikasūtropaskāra of Śaṅkara Miśra in Nārāyaṇa 1969.
VSV	Vaiśeṣikasūtravyākhyā in Thakur 1957.
Vyom	Vyomavatī of Vyomaśiva in Gaurinath Sastri 1984.

参考文献（日本語以外）

Athalye, Y. V. & Bodas, M. R. 1897. *Tarka-saṃgraha of Annambhaṭṭa,* Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1988.

Bhandarkar, D. R. & Pandit Kedarnath, Sahityabhusana 1979. (Eds) *Takra-Bhāṣā of Keśava Miśra with the Commentary*

Tarkabhāṣāprakāśikā of Cinnaṃbhaṭṭa, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Bhattacharya, Dineshchandra 1958. *History of Navya-Nyāya in Mithilā,* Darbhanga: Mithila Institute.

Bronkhorst, Johannes 2009. 'Some Uses of Dharma in Indian Philosophy', *Dharma: Studies in its Semantic, Cultural and Religious History,* Delhi: Motilal Bararsidass: 311–328.

Dhundhirāja Śāstrī 1940. (Ed.) *The Ātmatattvaviveka of Śrī Udayanāchārya with the Nārāyaṇī Commentary of Śrī Nārāyaṇāchārya Ātreya & The Baudhādhikāra Dīdhiti Commentary of Śrī Raghunātha Śiromaṇi with Baudhādhikāra Vivṛti of Śrī Gadādhara Bhaṭṭāchārya,* Benares: Chowkhambā Saskrit Series Office.

Dravid, N. S. 1995. *Atmatattvaviveka by Udayanācārya with Translation, Explanation and Analytical-Critical Survey,* Simla: Indian Institute of Advanced Study.

Dvivedin, V. P. & Dravida, L. S. 1939. (Ed.) *Ātmavattvaviveka with the Commentaries Ātmatattvavivekakalpalata of Śaṅkara Miśra, Ātmatattvavivekaprakāśikā of Bhagīratha Ṭhakkura, Ātmatattvavivekadīdhiti of Raghunātha Tārkika Śiromaṇi,* Bibliotheca Indica Work No. 170, Calcutta: The Asiatic Society.

Frauwallner, E. 1984. "Der ursprüngliche Anfang der Vaiśeṣika-Sūtren," *Nachgelassene Werke I, Aufsätze, Beiträge, Skizzen-hrsg. von Ernst Steinkellner,* Wien: 35–41.

Gaurīnātha Śāstrī 1981. (Ed.) *Kiraṇāvalīrahasyam of M. M. Mathurānātha Tarkavāgīśā,* M. M. Śivakumāraśāstrī Granthamālā Vol. 4, Varanasi: Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya.

Gaurinath Sastri 1983. (Ed.) *Vyomavatī of Vomaśivācārya,* Part One, Varanasi: Sampurnanand Sanskrit Vishvavaidyalaya.

Gaurinath Sastri 1984. (Ed.) *Vyomavatī of Vomaśivācārya,* Part Two, Varanasi: Sampurnanand Sanskrit Vishvavaidyalaya.

Gopinath Kaviraj 1920. (Ed.) *Kiraṇāvalībhāskara,* Benares: Government of Sanskrit Library.

Gopinath Kaviraj & Dhundhiraj Shastri 1924. (Eds) *Praśastapādabhāṣyam of Praśasta Devāchārya with* Commentaries (up to Dravya), Sūktī by Jagadīśa Tarkālaṅkāra, Setu by Padmanābha Miśra and Vyomavatī by Vyomaśivāchārya (to the end), Benares. (Second Edition, Varanasi: Chaukhamba Amarabharati Prakashan , 1983).

Ingalls, Daniel H. H. 1957. "Dharma and Mokṣa", *Philosophy East and West* 7, 1/2: 41–48.

Jambuvijayaji 1961. (Ed.) *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda,* Gaekwad's Oriental Series No.136, Baroda: Oriental Institute.

Jetly, J. S. 1971. (Ed.) *Praśastapādabhāṣyam with the Commentary Kiraṇāvalī of Udayanācārya,* Oriental Institute: Baroda.

Jetly, J. S. and Parikh V.G. 1991. (Eds) *Nyāyakandalī being a Commentary on Praśastapādabhāṣya with three Sub-commentaries,* Gaekwad's Oriental Series No. 174, Baroda: Oriental Institute.

Kāmākhyānātha Tarkavāgīśa 1897. *Tattvacintāmaṇi of Gaṅgeśa Upādhyāya with the Commentary Āloka by Jayadeva Miśra,* Bibliotheca Indica 98 (vol. II: Anumānakhaṇḍa, part 2: Īśvarānumāna), Calcutta: The Asiatic Society.

Nārāyaṇa Miśra 1969. (Ed.) *Vaiśeṣikisūtropaskāra of Śaṅkaramiśra with The Prakāśikā Hindī Commentary by Ḍhuṇḍhirājaśāstrī,* Kashi Sanskrit Series 195, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.

Narendrachandra Bhattacharya Vedantaritha 1956. (Ed.) "APPENDIX (Dravya:kiraṇāvalī-ṭīkā), *Kiraṇāvalī of Udayanācārya,* Fasc. IV, Kolkata: The Asiatic Society (repr. 2002).

Nozawa, Masanobu 1996. 'Concept of *yoga* in the *Vaiśeṣikasūtra*', 『今西順吉教授還暦記念論集：インド思想と仏教文化』春秋社：17-30.

Ruben, Walter 1928. (Ed. and Tr.) *Die Nyāyasūtra's. Text, Ubersetzung, Erlauterung und Glossar,* Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, Band 18, No. 2, Leipzig.

Sārvvabhouma, S. C. 1911. (Ed.) *Kiraṇāvalī with the Commentary Kiraṇāvalīprakāśa of Vardhamānopādhyāya,* Fasc. I-III, Bibliotheca Indica Work No. 200, Calcutta: The Asiatic Socierty (repr., 1989).

Sukthankar, Vishunu S. & Belvalkar, S. K. 1947 (Eds) *The Mahābhārata,* Vol. 7, Bhandarkar Oriental Research Institute: Poona.

Tachikawa, Musashi 2001. "The Introductory Part of Kiraṇāvalī", *Journal of Indian Philosophy* 29: 275-291.

Thakur, Anantalal 1957. (Ed.) *Vaiśeṣikadarśana of Kaṇāda: with an Anonymous Commentary,* Darbhanga: Mithila Institute.

Thakur, Anantalal 1996. (Ed.) *Nyāyavārttikatātparyaparišuddhi of Udayanācārya,* Nyāyacaturgranthikā Vol. IV, New Delhi: Indian Council of Philosophical Research.

Wezler, A. 1982. "Remarks on the Definition of 'yoga' in the Vaiśeṣikasūtra," *Indological and Buddhist Studies: Volume in Honor of Prof. J. W. de Jong on his Sixtieth Birthday*, ed. L. A. Hercus et al. Canberra: Australian National University Press: 643-686.

参考文献・日本語

安達俊英　一九八四　「ヴァイシェーシカ・スートラにおける解脱について」『印度學佛教學研究』六四、一三六―一三七
宇井伯壽　一九六五　「勝論経に於ける勝論学説」『印度哲学研究3』岩波書店：四一九―五九四
金倉圓照　一九七一　『インドの自然哲学』平楽寺書店
金倉圓照　一九七四　「勝論のアドリシュタ（adṛṣṭa）について」『インド哲学仏教学研究』Ⅱ、春秋社：三七三―四〇二
金沢　篤　二〇〇三　「前生想起と解脱：知行併合論の哲学的基盤Ⅳ」『駒澤大学佛教學部研究紀要』六一、一―二八
上村勝彦　一九九二　『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫
鈴木孝典　二〇一〇　「ヴァイシェーシカ学派における「論理」志向と「聖典」志向：解脱の存在に対するpramāṇaをめぐって」『印度學佛教學研究』一二〇、二二六―二三〇
中村　元　一九九六　「ニヤーヤとヴァイシェーシカの思想」『中村元選集［決定版］25』春秋社
野澤正信　一九八一　「ヴァイシェーシカにおける生死について」『日本佛教學會年報』四六、四五九―四七二
野沢正信　一九九五　「『ヴァイシェーシカ・スートラ』の二つの層」『インド思想史研究』七、七二―八四
野沢正信　二〇〇〇　「ニヤーヤ学派に言及される初期ヴァイシェーシカ学派の輪廻説」『印度哲学仏教学』一五、一一四―一三〇
服部正明　一九六六　「古典ニャーヤ学派のアートマン論とその背景」『哲学研究』五〇〇、五二一―五四五
服部正明　一九八九　「ヴァイシェーシカ・スートラにおけるダルマについて」『藤田宏達博士還暦記念論集：インド哲学と仏教』平楽寺書店：三七―五四
菱田邦男　一九九三　『インド自然哲学の研究』山喜房佛書林
宮元啓一　一九八二　「ニヤーヤ、ヴァイシェーシカ両派の解脱観」『仏教思想8：解脱』平楽寺書店：三二七―三五二

村上真完　一九七九　「知行併合論（samuccaya-vāda）」『印度學佛教學研究』五五、一六―二一
山本和彦　二〇一〇　「『ニヤーヤ・スートラ』の解脱論」『大谷大学研究年報』六二、一―三五
和田壽弘　二〇〇一　「インド自然哲学における解脱」『癒しと救い：アジアの宗教的伝統に学ぶ』玉川大学出版部：一三五―一五三
渡瀬信之　一九九〇　『マヌ法典』中公新書